

## わが国の幼稚園における数量指導の変遷

安齊 智子

(平成10年9月30日受理)

### How The thatching method of Numbers and Quantities had changed in Kinder Garten of Japan

Tomoko ANZAI

(Received on September 30, 1998)

#### 1. はじめに

数量は、人間の生活にとって欠かせないものであり、数量概念やその使用範囲が発展するとともに我々人間の生活も発展してきたとも言える。そのため、人間の知的能力の1つとして数量を扱うことやその概念を身につけることが古くから要求されてきた。

数量を取り扱う能力や数量の概念をどれくらいの時期から、また、どのように伝えていけばよいのかという問いは、それぞれの時代に存在したことだろう。そして、その時代の生活を基盤にその社会がもつ価値観や子どもの発達観などの影響を受けて、これまで様々な考え方が示され、また実際に数量の知識、能力の伝達が行われてきている。とくに、幼児教育の現場である幼稚園においては、幼児期の数量指導がどのようになされるべきかという議論がこれまで何度も繰り返され、様々なやり方で数量の指導がなされてきた。

わが国、日本の幼稚園において、幼児期の数量指導はこれまでどのように考えられ、実際にはどのように行われてきたのだろうか。

本論では、幼児の教育機関である幼稚園において、これまで数量の指導がどのようになされてきたのかについて調査、整理し、数量指導の変遷を明らかにする。そして、これを明らかにすることによって、今後の幼児期における数量指導の方向性について検討するものである。

#### 2. 保育内容の基準の中で数量がどのように扱われてきたか

保育内容の基準の上で、数量の指導はどのように扱われてきたのだろうか。まず、基準の上での数量指導の変遷を整理する。

##### (1) 『東京女子師範学校附属幼稚園規則』(幼稚園創設～明治31年)

わが国に始めて幼稚園が設立されたのは、明治9年であり、その後明治31年までは、日本の幼稚園で統一された保育内容の基準はなかった。日本で初めての幼稚園、東京女子師範学校附属幼稚園が設立されると、各都府県でも幼稚園が次々に設立された。その保育内容は、地域特有の内容が含まれているものもちろんあるが、ほとんどが東京女子師範附属幼稚園における保育内容を参考にしながら、というよりもほぼ真似ているようであった。従って、この当時の保育内容の基準は、実質的に日本で始めて幼稚園が設立された翌年の7月に制定された『東京女子師範学校附属幼稚園規則』であったと言える。

そこで、幼稚園が日本に設立されて十数年、当時の基準は、『東京女子師範学校附属幼稚園規則』と考え、この中で数量指導がどのように扱われているのかをみることにする。

まず、保育内容としては3つの保育科目が設けられているが、その中の第三 知識科 では、「観玩ニ由テ知識ヲ開ク即チ立方体或ハ幾個ノ端線平面幾個ノ角ヨリ成リ其形ハ如何ナルカ等ヲ示ス」<sup>1)</sup>となっている。立方体とはつまり恩物のことであり、恩物の中の第三、四、五、六恩物の積木を用い平面や角、辺の数を知らせることでその形の理解を促すということが、保育科目の3つめの

知識科の具体的内容として記述されているのである。3つの保育科目に含まれる25子目の中の「形體の積み方」、つまり第三、四、五、六恩物の具体的な指導の内容についての倉橋の説明<sup>2)</sup>をみると、「八個の木片<sup>れ</sup>を以て組合したる立方状<sup>しかくかた</sup>の一體を現すべし。……立方状の全體を二個に分ち、四個に分ち、又は八個に分ち、或は之を卓子の上に列ね、或はその数を算計<sup>あざふ</sup>する如き幼稚<sup>こしょう</sup>の意に任すべし。……」となっており、恩物の中の積木を用いた指導の中で数を数えるということがなされていたことがわかる。当時の保育の中心でもあった西洋から導入された恩物の中に、数量に関わる指導が基本的な形体の構造の理解を促す内容とともに含まれていたのである。

また、25子目の中には「計数」も含まれている。具体的にどのように「計数」を指導するのかについては記述されていないが、保育時間割表をみると、満3年以上満4年以下では「一ヨリ十二至ル」、満4年以上満5年以下では「一ヨリ二十至ル」、満5年以上満6年以下では「一ヨリ百至ル」と、扱う数の範囲を示している。この当時の数量の指導は、「計数」、つまり、数えるということが中心となっていたようである。しかも、100までのかなり大きな数まで数えることが要求され指導されていた。

明治14年になると、それまでの保育科目に改正が加えられた。恩物の中の「形體の積み方」は名称を「木ノ積立テ」と変えられたが、内容はそのまま残されており、恩物を用いた数量の指導は引き続き行われていたようである。一方、それまでの「計数」はなくなったが、「数へ方」として数量の指導が加えられた。その具体的内容も「数へ方ハ専ラ果物、小石、介殼其他ノ実物ニ由テ物ノ数ヲシラシムルヲ旨トシ数ノ觀念ヲ略得タルモノニハ又實際ニ三十個以下の寄せ方引キ方をナサシメ兼テ十以下ノ数字ヲ教フ。」<sup>3)</sup>とより高度な内容の足し算、引き算や数字といったものが付け加えられたのである。

数量指導の内容はそれまでのように数えることだけでなく、小学校の算数的な高度なものが付け加えられるようになったが、改正に当たっての保育の要旨では「……又保育課中数へ方読ミ方等心意ノ勞ヲ要スルモノハ之ヲ時間ノ始メニ置キ……」<sup>4)</sup>と述べられおり、その方法はより幼児が集中して取り組めるようにとの考えが見られる。

さらに明治17年にも保育科目の改正が行われたが、数量の指導に関するものはそのまま残され、明治14年に示された内容がそのまま引き続き行われていた。

## (2) 『幼稚園保育及設備規定』(明治32年～)

明治32年6月、文部省令として『幼稚園保育及設備規定』が制定された。これにより、ようやく幼稚園の目的、編成、組織、保育内容、施設設備に関する国としての初めての基準が示されたことになる。

この基準によると、保育内容は「遊嬉、唱歌、談話、手技」<sup>5)</sup>の4項目とされた。「計数」や「数へ方」といったそれまでの数量指導に直接関わる項目は、すっかり姿を消してしまったのである。

恩物については、「手技」の中に含まれ、「手技ハ幼稚園恩物ヲ用ヒ手及眼ヲ練習シ心意ノ發育ノ資トス」<sup>6)</sup>とされた。つまり、恩物を用いた保育は引き続き行われたが、その主旨は手や眼の操作を練習することであり、それまでのような数量の指導に関する内容は基準の中では言及されていない。

明治32年より、基準の上では、数量指導に関する保育内容の項目が除かれてしまっているのである。実際の保育の上ではどうであったのかについては後で述べることにする。

## (3) 『幼稚園令』(大正15年～)

大正15年になると、『幼稚園令』が公布された。『幼稚園令』では、同施行規則第二条の中で保育内容を規定している。これによると、「幼稚園ノ保育項目ハ遊戯、唱歌、觀察、談話、手技等トス」<sup>6)</sup>とされており、数量指導に関する項目は見当たらない。

基準の上では、この当時も数量指導に関する項目はなかったのである。

## (4) 『保育要領－幼児教育の手引き－』(昭和23年～)

昭和23年には、文部省から幼児教育書として『保育要領－幼児教育の手引き－』が刊行された。これによると、6章の幼児の保育内容－楽しい経験－の中に、数量に関する項目はやはり含まれていない。

しかしながら、1章のまえがきには、幼児期は他の時期とは異なった特質があり、この特質に適した教育の必要性があると述べられ、第2章ではその発達の特質について身体、知的、情緒、社会的方面からの解説がなされている。2歳児～5歳児までのそれぞれの年齢毎にいくつかの発達の特質が書かれてあるが、知的発達の特質の中で数に関するものについては、3歳児では「四つのものを数える」、4歳児では「13まで正しく数える」「重さの比較ができる」<sup>7)</sup>などと説明されている。

また、第3章の幼児の生活指導では、2番目に知的発

達をとりあげ、子どもの自主性や興味に応じた指導、一斉の指導ではなく個々の特性に応じた指導の重要性を強調している。つまり、『保育要領－幼児教育の手引き－』では、数量指導についての具体的内容は言及されていないが、発達の特質に即した教育の必要性が強調され、幼児の発達を理解した上で子どもの興味、自主性に応じた指導が打ち出されているのである。

(5) 『幼稚園教育要領』（昭和31年～）

『保育要領－幼児教育の手引き－』では、楽しい幼児の経験が挙げられているだけであったが、昭和31年には、保育内容について小学校との一貫性を持たせ、領域を設けて系統的に内容を示した『幼稚園教育要領』が刊行された。

昭和31年の『幼稚園教育要領』では、数量指導を6領域の1つである「自然」の中に含めている。「簡単な数や量や形などに関心をもつようになる。」ことを達成する目標とし、「物の大小・形・数量や方向・位置・速度などに関心をもつようになる。」という幼児期の発達の特質をふまえて、「物の大小・軽重・数量・形などを比べる。」といった望ましい経験を幼児にさせることがその内容である<sup>8)</sup>。

数量の指導については、『保育要領－幼児教育の手引き－』に比べると、より具体的にその内容が示されたといえる。

(6) 『幼稚園教育要領』（昭和39年～）

昭和31年に出された『幼稚園教育要領』における基本方針は、幼児の生活経験を重視するものであったが、領域ごとに具体的な目標やそれが達成されるような経験が出されているので、単にそこに書かれている事項を内容として取り出し教育課程を編成していけばよいという傾

向が強くなってきた。そのため、昭和39年に『幼稚園教育要領』の改訂が行われた。

新しい『幼稚園教育要領』における数量指導は、やはり前教育要領と同様に6領域の1つである「自然」に含まれている。その具体的内容は資料1の通りである。

数量指導については、興味や関心をもつことと述べられ、これは前の『幼稚園教育要領』とほとんど変わらない。しかしながら、この事項に関する具体的な経験や活動については、「物の大小・軽重・数量・形などを比べる。」とだけあったのが、改訂後は「比べる」ことに加え、「分けたり寄せ集めたり」、「具体的な事物を数えたり、順番を言ったり」、などより多様な経験や活動の内容が示された。

また、その指導についても「四に関する事項の指導にあたっては、幼児の年齢や発達の程度に応じて、数量や図形などに関して基礎となることからの理解に役立つ経験や活動をさせるようにすること。なお、数については、日常生活や遊びのなかで、幼児の年齢や発達の程度に応じて具体的な事物と対応させながら取り扱うこと。また、いたずらに数詞を多く覚えさせたり、多くのものを数えさせたりするようなことは望ましくないこと。」<sup>9)</sup>と留意する点をあげ、より細やかな指導の在り方を示している。

(7) 『幼稚園教育要領』（平成元年、現行）

平成元年には再び『幼稚園教育要領』の改訂が行われた。これが現行の『幼稚園教育要領』である。

現行の『幼稚園教育要領』では、数量指導については5領域の1つである「環境」の中に含まれている。その内容は資料2に示すとおりである。

資料1 「幼稚園教育要領」（昭和39年）より

四 数量や図形などについて興味や関心をもつようになる。

- (一) 具体的な事物によって、量の大小を比べる。
- (二) いくつかの物を分けたり寄せ集めたり、これらを整理したりする。
- (三) 日常生活の中で具体的な事物を簡単な数の範囲で数えたり、順番を言ったりする。
- (四) 長い短い、広い狭い、または速いおそいなどに興味や関心をもつ。
- (五) 物の形について興味や関心をもち、丸や四角などの特徴に気づく。
- (六) 前後、左右、遠近などの位置関係について興味や関心をもつ。
- (七) 日常生活を通して時刻について興味や関心をもつ。

資料2 「幼稚園教育要領」(昭和元年)より

1 ねらい

(3) 身近な事象を見たり考えたり扱ったりする中で、ものの性質や数量などに対する感覚を豊かにする。

2 内容

(8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。

3 留意事項

(2) 数量などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切に、数量などに関する興味や感心、感覚が無理なく養われるようにすること。

まず、ねらいが示されているが、「……数量などに対する感覚を豊かにする」というように、数量感覚を養うことがねらいになっているのである。数量についての認識を高めたり、数量を扱うことができるようになることではなく、現行の教育要領では、数量的思考力の基礎となる数量感覚を豊かにすることが幼児期には大切であるとの考えが示されているのである。

指導の内容については、「数量や図形に興味や関心をもつ」と、改訂前の教育要領と変わっていないが、「日常生活の中で」という言葉がその頭につけられた。改訂前の教育要領の際も『幼稚園教育指導書』の中で「日常生活の中で」ということは述べられてはいたが、改訂後の教育要領ではより強調されるようになったと言える。そして、改訂前には、具体的な経験や活動が多く挙げられていたが、改訂後の教育要領では「日常生活の中で数量や図形に関心をもつ。」とだけ示されている。

また、指導上の留意する事項では、「必要感に基づく体験を大切に」、「興味や感心、感覚が無理なく養われるようにすること。」と、改訂前の教育要領に引き続き、幼児期の特性をふまえた日常生活の中での指導の重要性を示し、教え込む教育ではなく幼児自身が無理なく数量感覚を身に付けることを強調しているのである。

(8) まとめ

幼稚園が日本に設立されてから十数年の頃までは、日本古来からある伝統的な計数や計算、そして西洋から導入された恩物による2つの方法で数量指導がしっかりと行われていた。しかしながら、国として初めて保育内容の基準を示した明治32年の『幼稚園保育及設備規定』では、4項目の保育内容から除かれてしまったのである。その後も大正15年に『幼稚園令』が公布されたが、この時にも保育内容の中に数量指導に関する項目はなかった。それまでの保育実践と研究が基礎となって、このように数量指導が保育内容から除かれたのだろうか。このこと

については、基準の中での扱いだけでなく実際の保育現場でどのように数量指導が扱われてきたかをみる必要があるだろう。従って、次の章で述べることにする。

明治32年から50年もの間、数量指導については全く触れられてなかったが、昭和23年の『保育要領—幼児教育の手引き—』が刊行され、再び数量指導について触れられるようになった。その後、昭和31年、39年、平成元年に『幼稚園教育要領』が出されるたび数量指導の内容や指導の方法などが微妙に変化し、現在に至っている。

『保育要領—幼児教育の手引き—』では、幼児期の発達的特質に即した教育の重要性というそれまでに示されていなかった考え方が示され、数量に関する各年齢の発達について述べられた。そして、知的発達に関する指導について、幼児の発達を理解した上での子どもの興味、自主性に応じた指導が強調されたのである。けれども、数量指導についての具体的内容は言及されていなかった。

数量指導についての具体的な内容が再び示されたのは、昭和31年の『幼稚園教育要領』であった。その内容は、具体的に「物の大小・軽重・数量・形などを比べる。」<sup>8)</sup>といった望ましい経験として示されたのである。また、発達的特質に即した指導という考え方は引き続き示されたが、その発達的特質は『保育要領—幼児教育の手引き—』で示された各年齢ごとの〇〇ができるようになるというような能力としての発達の捉え方ではなく、「物の大小・形・数量や方向・位置・速度などに関心をもつようになる。」<sup>8)</sup>と、広い視野での発達の捉え方になった。昭和39年の『幼稚園教育要領』では、数量指導の内容がより多様に7項目も列挙された。また、その指導については、発達に応じた指導の重要性に加え、日常生活や遊びのなかでの経験を重視する考えが新たに示された。現行の『幼稚園教育要領』でも改訂前の主旨はほぼそのままであるが、さらに数量感覚を養うこと、また必要感に基づく体験を大切にすることが示された。

以上のように保育内容の基準を数量指導という観点から整理してみると、

- ① 幼稚園創設から十数年間は、西洋から導入された恩物による数量指導と日本古来からある伝統的な計数や計算を教える数量指導の時期、
- ② 明治32年～昭和22年頃は、数量指導について全く触れられていない時期、
- ③ 昭和23年以降は、幼稚園における幼児にふさわしい数量指導の在り方について模索している時期
  - ・昭和23年～：幼児期の発達的特質に即した指導を強調
  - ・昭和31年～：経験することの重要性が述べられ、幼児に望ましい経験が示された
  - ・昭和39年～：日常生活や遊びの中での経験を重視する考えを強調し、望ましい経験が列挙された
  - ・平成元年～：幼児期は数量的思考力の基礎となる数量感覚を養う時期であるとし、数量感覚を日常生活の中で経験することの重要性を強調

であったことがわかった。

### 3. 保育現場において数量指導がどのように扱われてきたか

#### (1) 明治期の数量指導

明治32年までは、日本で初めて設立された東京女子師範学校附属幼稚園の規則が事実上の規準となっていたが、それぞれの幼稚園では実際にどのように数量指導を取り扱っていたのだろうか。

まず、明治32年に『幼稚園保育及設備規定』で示された保育項目から数量指導が除かれるに至るまで、各幼稚園における保育内容の中に数量がどのように扱われていたかについて、その変遷を整理する。明治期の保育内容の変遷については、安齊智子、柴崎正行<sup>9)</sup>が詳細に整理、分析しているので、これを参照しながら、各幼稚園における保育規則や保育課程・保育時間割、幼稚園設置の際の設置伺書、あるいは各幼稚園の記念誌等から得られる資料を基に、数量指導に関する保育項目の有無の変遷を示したのが表1である。

この表からは、明治25年頃を境にして数量指導に関する項目が保育内容から消えていることがわかる。明治32年の『幼稚園保育及設備規定』で保育項目から数量指導

が除かれる以前に、すでに各幼稚園では保育項目から数量指導を除いていたのである。群馬の高崎幼稚園では、明治21年にすでに数量指導に関する保育項目を幼稚園の規則から除いている。また、岡山県でも明治24年には旭東幼稚園、明治29年には倉敷幼稚園と笠岡尋常小学校附属幼稚園、明治30年には深低幼稚園と、あいついで数量指導を保育項目から除いている。東京女子師範学校附属幼稚園よりも先に、数量指導を保育項目から除いていた幼稚園がいくつもあったのである。

初期の頃は、ほとんどの幼稚園が東京女子師範学校附属幼稚園の保育科目をそのまま模倣しており、「計数」あるいは「数へ方」などの数量指導を行っていたが、日々の保育実践や研究の中で、このような結果になったのだと考えられる。例えば、大阪の愛珠幼稚園では、明治26年に「数え方もまた幼児の能力に適せぬことを認めこれを廃す」<sup>10)</sup>という記述が残されている。

では、明治初期に行われていた「計数」「数へ方」と言われる数量指導は具体的にどのような指導であったのだろうか。明治の初期は、具体的な保育の様子が記述されたものが少なく、各幼稚園規則や設置伺書などに挙げられた保育項目がわかる程度である。当時の幼稚園の模範となった明治10年最初の東京女子師範学校附属幼稚園規則では、保育項目の中に「計数」が含まれているが、それは、倉橋の「日本幼稚園史」によると、「簡単な数の扱い」<sup>11)</sup>としか述べられていない。明治14年の保育科目改正では、「計数」から「数へ方」となり、その内容は果物や小石、介殻など実物の数を知らせること、30以下の足し算引き算、又10以下の数字を教えることであり、より高度な内容の数量指導となっている。これを真似て他の県の幼稚園でも「数へ方」を保育項目の1つとしているが、その内容は各々の幼稚園で若干異なっているところもある。例えば、明治17年の岡山県師範学校幼稚科規則では、「数へ方ハ実物ニツキテ数へ方ヲ知ラシムルヲ旨トシ兼ネテ以下ノ数字ヲ史シラシムルニ注意スベシ」<sup>12)</sup>となっており、計算が除かれている。また、同じく明治17年、京都の小学校附属幼稚保育科規則でも「数へ方ハ実物ニ就キテ数へ方ヲ知ラシムルヲ旨トシ兼ネテ十以下ノ数字ヲ知ラシムルニ注意スルヲ要ス」<sup>13)</sup>と計算は除かれている。数量指導についても、その土地の生活や価値観など、それぞれの状況に合った内容が考えられていたのである。

このように「計数」「数へ方」などの数量指導が保育

表1 明治期の幼稚園における「数量指導」に関する保育項目の有無

年代	幼稚園	地域	(有は○、無は空白)				備考
			計	数	数へ方	算術	その他
M. 8	幼稚園(*1)	京都					数字
M. 8	幼稚遊戯場概則(*2)	京都					
M. 9	石川県幼稚集遊場設立備考(*3)	石川					積量
M. 10	東京女子師範学校附属幼稚園規則(*4)	東京	○				「積量」立方体の白木に数字を書いたものを用意し口述する
M. 12	大阪府立模範幼稚園「幼稚園手引」(*5)	大阪	○				
M. 12	岡山区公立小学校教則下等小学教則 幼稚科(*6)	岡山				○	この時、岡山県にまだ幼稚園が存在しなかった
M. 12	鹿児島女子師範学校附属幼稚園規則(*7)	鹿児島		○			
M. 13	桜井女学校附属幼稚園規則(*8)	東京	○				
M. 13	愛珠幼稚園志留弁(*9)	大阪	○				
M. 14	東京女子師範学校附属幼稚園保育科目改正(*10)	東京		○			
M. 14	公立江東小学校附属幼稚園(*11)	東京					
M. 16	共立幼稚園第二幼稚園設置許可願い(*12)	東京					
M. 16	群馬県幼稚園設置伺(尋常科)(*13)	群馬	○				
	〃 (随意科)	群馬					
M. 16	竹間小学校幼児保育科(*14)	京都					
M. 17	東京女子師範学校附属幼稚園保育科目改正(*15)	東京		○			
M. 17頃	芝布共立幼稚園保育課程表(*16)	東京		○			
M. 17頃	公立深川幼稚園(*17)	東京		○			
M. 17	公立麹町幼稚園保育課程表(*18)	東京		○			
M. 17	小学校附属幼稚保育科規則(府布達)(*19)	京都		○			
M. 17	幼児取扱心得(*20)	石川		○			
M. 17	岡山県師範学校幼稚園科規則(*21)	岡山		○			
M. 18	幼児保育心得(*22)	石川					
M. 18	石川県学事報告第6号 金沢幼稚園(*23)	石川		○			
M. 18	幼稚保育規則(岡山県)(*24)	岡山		○			
M. 19	幼稚開講室 開設当初(*25)	群馬		○			
M. 19	大聖寺京達小学校附属幼稚園設置伺(*26)	石川		○			
M. 19	長崎県師範学校附属幼稚科規則(*27)	長崎					算へ方
M. 20	誠之小学校附属幼稚室設置願(*28)	東京		○			
M. 20	東筑摩郡第壹番学区町村立開智学校附属幼稚園設立伺(*29)	長野		○			
M. 20	京都府尋常師範学校附属小学校幼稚保育科規則(*30)	京都					算へ方
M. 20頃	石川県尋常師範学校附属幼稚園 保育時間割(*31)	石川	○				
M. 21	高崎幼稚園規則(*32)	群馬					
M. 22	公立番町高等尋常小学校附属幼稚園設置伺(*33)	東京		○			
M. 22	大阪市幼稚園規則(*34)	大阪		○			
M. 23	公立赤坂高等尋常小学校附属幼稚園 保育課程表(*35)	東京		○			
M. 24	礪川小学校附属幼稚園 幼稚園設置之儀申請(*36)	東京		○			
M. 24	岡山市立旭東幼稚園保育規定(*37)	岡山					
M. 25	東京女子高等師範附属幼稚園分室(*38)	東京					
M. 25	石川県尋常師範学校附属小学校附属幼稚園規則(*39)	石川		○			
M. 25	大阪府尋常師範学校附属幼稚園規則(*40)	大阪					
M. 26	京都府尋常師範学校附属幼稚園規則(*41)	京都					
M. 26	愛珠幼稚園 幼稚園規則改訂(*42)	大阪					
M. 29	倉敷幼稚園保育規定(*43)	岡山					
M. 29	笠岡尋常小学校附属幼稚園保育規定(*44)	岡山					
M. 30	深低幼稚園(*45)	岡山					
M. 31	フーベル会 幼稚園制度ニ関スル建議書(*46)	東京					
M. 32	『幼稚園保育及設備規定』(*47)						
M. 32頃	京都市柳池幼稚園規則(*48)	京都					
M. 32頃	高崎幼稚園保育科目編纂(*49)	群馬					数
M. 34	京都府尋常師範学校附属幼稚園規則(*50)	京都					保育課目以外に数を教えた
M. 39	東京女子師範学校附属幼稚園保育要領(*51)	東京					
M. 41	石川県師範学校附属幼稚園 通信簿(*52)	石川					
M. 41	京都府女子師範学校学則(*53)	京都					

内容の1つとして扱われていたことは、当時の父母の要求が大きな1つの理由となっていると考えられる。例えば、明治5年の学制には、幼稚小学は「男女ノ子弟六歳迄ノモノ小学ニ入ル前ノ端緒ヲ教ルナリ」<sup>14)</sup>と規定されており、小学校の設置だけで幼稚小学まで手がおよばなかったために当時は就学前の幼児を父母の希望で小学校に入学させることを許されていたところが多かった。そして、幼児を小学校へ入学させることを希望する父母が多かったことは、明治17年に文部省から「学齡未滿ノ幼児ヲ学校ニ入レ学齡兒童ト同一ノ教育ヲ受ケシムルハ其害不尠候條右幼児ハ幼稚園ノ方法ニ因リ保育候様取計フヘシ……」<sup>14)</sup>と通達を受けたことからわかる。実際、父母から幼稚園では何も教えてくれないから困るというような不平があったことから、幼稚園と小学校とのつながりのことも考慮して、東京女子師範学校「附属小学校の最下級と幼稚園の最上級とを一緒に纏めてしまったことがある。」<sup>15)</sup>のである。当時、我が子に幼児期から小学校で行われるような読み書きや算数の指導を望んでいた親が多かったことがわかる。従って、この当時は幼稚園でも単に数を数えることだけにとどまらず、計算や数字についてもしっかりと数量の指導を行うことが強く求められていたと言える。

しかしながら、前述の愛珠幼稚園のように、日々の保育実践から幼稚園ではこのような小学校的な指導は幼児には合わないという考えが強く出されるようになってきたのである。このように親のニーズを受けながら、幼稚園における保育実践の経験のなかでこのような数量指導は、各幼稚園で除かれていったのである。そして、明治30年頃には「幼稚園は読書を教へるものでもなければ、算術を教へるでもない、……」<sup>16)</sup>という考えが、現場では一般的になってきたのである。

一方、明治期の保育では、「恩物」が最も重視されている。当時の保育項目の中の第三、四、五、六恩物を用いた「形體の積み方」では、立方体の平面や角、辺の数を知らせたり、立方体そのものの数を数えることを行っていた。恩物は、フレーベルの「神性を持っている人間が神の認識に到達するために神の創った自然を研究する」との考えから、神の創った自然界の姿を象徴したものである。いくつかの小さな立方体や三角柱などからなる大きな立方体であり、その1つ1つの形やそれらによって作られる形の構造を幼児に示し理解を促すものであったが、当然その中には数量に関する内容が含まれていたの

である。当時の保育の様子について記述されているものを見ると、積木という項目で「入園当時は正方形、長方形、を四つ与えて随意にせしめ其れと共に四の数へかたも練習せり其の後正方形長方形を五つ又は六つ与えて五六等の数へかたを練習せり……而して積木の度毎に八の数へかたをなすを例とせり……数へかたの練習は他のものによりてもなせりが主として此積木によれり……」<sup>17)</sup>とある。積木、つまり恩物によって数量指導は行われていたようである。

『幼稚園保育及設備規定』では、保育項目から「計数」や「数へ方」を除き、「恩物」はその名称を「手技」と変えて「形體の積み方」もその中に含めてしまったが、当時の保育は「恩物」がまだ重視されていたので、以上のような「恩物」を用いた数量指導が行われていたことが推察される。

## (2) 大正期の数量指導

大正時代においても、数量指導が保育項目から除かれた『幼稚園保育及設備規定』が規準となっていたが、実際の保育現場では数量指導を全く行っていないのであろうか。明治25年以前はどの幼稚園でも小学校的な数量指導が行われていたが、それ以降は保育項目には全く数量指導に関する内容は見当たらない。

ところが、明治の終わり頃には「子どもが三才以上になったら数を勘定するようになります、家庭では三才以下でも数の観念が生じて居る、……況や幼稚園では三才以上の者ですから十までの数の勘定はできる筈であります、然るに読書算の如きは保育上禁ぜられて小学に於いてなすべきことで幼稚園ではなすべきことではないとしてあります、これは如何でしょうか、児童には早や要求が起こって居るに拘らず矢張り小学校にゆづらねばなりませぬか、これも一つの矛盾ではなからうか、」<sup>18)</sup>と幼稚園の保育内容から数量指導を全く無くしてしまったことに対して、疑問を訴える者もいた。また、大正期に入ると、文字や数の指導に対して「……私の考えでは上の組で子供が覚えたいならば教へてもよいと思ふが小学校式にやるのはむりなことと思ふ」<sup>19)</sup>とそれまでの小学校的な内容と指導法には疑問をもつが年長の子どもには子どもの自主性を尊重した上での指導は良いのではないかという見解もみられるようになった。

また、実際の保育現場では、明治の後半に記述されたものであるが、遊嬉の中の「時計」という遊び（と言われているもの）の中で「……時計の音を数ふるに幼児声

を出して数ふること……此遊びに於いては幼児に数ふることを最も興がりてなすを……」<sup>20)</sup>と、数量の指導が遊嬉のなかで行われている様子がわかる。大正期にも「……又は数に就いての智識が劣って居る子には、数の名称や観念を教へる事もあり、……」<sup>21)</sup>という記述があり、保育項目の中に数量指導はなくなっているものの実際には、以前のような小学校的な指導方法ではないが数量の指導が行われていたのである。

さらに、大正後期になると、幼児期の数量概念の発達について述べられるようになる。東京市視学の山内太一は、幼児はただ数を唱えることはできるが基数の認識はないことを指摘し、「数をたくさん児童に教へ込むよりは、十位まででよろしいから、数の内容に関するはっきりした意識を有たせたいものです。」<sup>22)</sup>とし、その指導については「子供の生活に深いもので、度々十という数を示すのです。」<sup>22)</sup>と述べている。また、東京女子高等師範学校訓導の岩下吉衛は、「四歳の子供は不完全ながら数詞を覚え、無秩序ではあるが之を唱へる。五歳になったばかりの子は既に実物について五十位までは正しく数

ているのである。

しかしながら、大半の幼稚園では保育項目の中に数量へることが出来、五歳の終りには、二十以下の数なら抽象的な数の分解結合が出来るものである。」<sup>23)</sup>と幼児期の数の発達について示し、さらに「児童等の一日の生活殊に遊戯中に之を仰ぐがよい、……一日を暮す自然の生活の中に数量指導の機会を見逃さぬ様にするのである」<sup>23)</sup>と数量の指導法について述べている。

大正後期は、幼児期にどの程度の数量概念が発達しているかを捉えた上で、幼児期の特質に合った指導法についての考えが出され始めた時期でもあった。

### (3) 昭和期の数量指導

昭和初期の規準となっていた『幼稚園令』では、遊戯、唱歌、観察、手技の5項目の保育内容のなかに数量指導は入っていなかったが、最後に「等」という言葉がつけられ、これは各幼稚園が適当と考える保育内容を設けることを認めたものであった。従って、いくつかの幼稚園では、数量指導を保育内容の項目の一つとして設けているところもあった。

#### 資料3 倉吉幼稚園 保育内容「数え方の時間」

四月十七日	七つまで指、紙、計数器にて数へる。色の見分け、五色、赤白、青、緑黄色彩の認識
五月三日	十迄
五月七日	指折りの練習
五月十七日	指折り 個々に発表さす
五月二十九日	耳、目の試験
六月六日	計数器にて、色々試験す
九月九日	色々の試験
十月十六日	人、鳥、動物について
十一月二日	耳、眼の試験
十一月二十五日	個々に発表

日本保育学会編 「日本幼児保育史 第四巻」フレーベル館 より

例えば、倉吉幼稚園の昭和10年の保育内容には、数え方の時間が設けられている<sup>24)</sup>。その内容は資料3に示すとおりである。「練習」であるとか、「試験」などという言葉が用いられ、数量指導をしっかり行っていた様子が分かる。また、昭和45年に、昭和前期に創立された幼稚園のうち100園に対し、当時の保育内容を調査したのを見ると、少数ではあるが、広島音戸幼稚園、金沢の大谷金沢幼稚園で行われていたようである。大谷金沢幼稚園では、特に力を入れていた内容に数量指導をあげ

指導は入っていない。けれども、全く数量指導が行われていなかったわけではないようである。

当時の明石女史師範学校附属幼稚園の保育案をみると、当時の保育の中で最も重要視されていた「遊戯」の中で数量の指導が行われていたことがわかる<sup>25)</sup>。その内容は、資料4に示すとおりであるが、年長組の「果物屋遊び」の中に売買実習という活動を設け、その中で10以下の数観念を導くようにしている。東京府女師附属幼稚園のト部たみも、「子供の生活の中に遊びの中に凡ての原



幼稚園二之組（年長）保育案

保母 岡本きくゑ

- 一 題材 果物屋遊び
- 二 動機 売買ごっこに興味を出發とす
- 三 過程

幼稚園の活動	望ましい活動への変化
<p>1. 果物屋見学 種類どんなものがあるか 色、大きさ（ママ）、並べ方 製作についての相談と実習 粘土細工 イ、何を作るか ロ、作り方 ハ、実物との比較訂正</p> <p>2. 第 日分 製作実習 切紙細工 イ、実物観察、形と色 ロ、着色、切紙で作る 製作品の陳列 イ、ならべ方 ロ、どれが上手に出来たかをきめる 形、色、作り方</p> <p>3. 第 日分 売手、買手の決定 希望によって 売買実習 イ、一人にやらず 用語、動作 紙製貨幣の使ひ方 ロ、自由売買 ハ、売手、買手の交代</p>	<p>○目的をもって観察する態度</p> <p>○よく実物を観察し特徴をつかみそのものらしく作る技術</p> <p>○衣服を汚さぬやうにする習慣</p> <p>○後仕末をよくする習慣</p> <p>○鉄を使う能力</p> <p>○陳列の仕方の知識 見えやすいやうに、体裁よくならべる</p> <p>○よく注意してみる習慣</p> <p>○売手、買手に適当な言葉をつかふ能力 ごめん下さい、いくらですか、いくつ下さい、はい、 ありがとうございました、毎度ありがとうございます</p> <p>○果物の値段の知識</p> <p>○十以下の数観念</p> <p>○売手、買手の作法</p>

四、到着目標

- 1 果物屋を見学する態度
- 2 初夏の果物の特徴をつかまへそれらしく製作する技能
- 3 陳列の仕方についての知識
- 4 売手、買手の作法
- 5 十以下の数観念

始学習の行われている事」を前提に、数えることに関係のある生活や遊びを挙げて、幼児期の数量指導は幼児の生活、遊びを十分にさせることが大切であり、生活や遊びの中で数量に関する事柄を見つけ出し指導するのが良いと言っている<sup>26)</sup>。また、東京市本郷大和郷幼稚園の坂内ミツは、「毎日生活して行く内に其機会を得る事が澤山ある」と幼児の生活の中で数量の指導を行うことの重要性を述べ、「興味を本意にし数へないで居られなくなって数へるといふようにしたい。」と幼児の興味と自主性を大切に、「数へる事について興味が起こったならば実物について数へる機会を多くつくるのである。」と、数えることに重点をおいていた<sup>27)</sup>。このように昭和に入ると、幼児の生活や遊びの中で数量についての指導が幼児期には適しているとの考え方が、保育現場から起こっていた。

さらに、幼児期の発達にあった指導の必要性ということから、大正期の終わり頃より幼児期の数量概念の発達を明らかにしようとする試みも行われていた。東京女子師範学校附属幼稚園では、4歳の子どもにボタンの数を数えさせたり、指定した数のボタンを取らせるなどの課題を与えて、どの程度その能力が備わっているのかについて調査を行っている<sup>27)</sup>。幼児期の各年齢にどの程度の数量に関する能力が備わっているのかを把握し、幼児期に無理なく、発達にあった指導を行うとの考えが一般的になっていたようである。

以上のように、その方法論という視点では幼児期の発達の特質に即して、日常生活の遊びの中での指導が重要であるとの考えに至っている。また、その内容は、専ら数えることに主眼がおかれていたようである。

戦後になると、欧米で発展してきた発達心理学の研究成果から大きな影響を受けるようになった。その中でもピアジェの子どもの思考の発達の研究は、最も影響を与えている。ピアジェは、まず、数には順序付けと階層的包括の関係があると、数の構造を示した。そして、保存の実験から、幼児期は論理的思考ができず直感的思考の段階であるとした。そこで、数には構造があり論理的なものであるから、これまでの数え主義の指導ではなく、数の構造を理解するような系統立てた指導が必要との見解が生まれたのである。また、論理的思考と直感的思考を結ぶものとして半具対物の導入が効果的であると、具体的な数量の指導法についても考えられるようになったのである。日本では、遠山啓の指導によって創り出され

た「集合の『大きさ』としての基数を主体とし、位取りの原理に基づいて筆算を体系化した」<sup>28)</sup>水道方式と呼ばれる指導法が有名である。水道方式では、半具体物として、タイルを教材として用いている。この水道方式による指導は、初等教育において大きな成果を上げたと言われた。当時、保育現場でもこの水道方式による数量指導が導入されたところも少なくなかった。水道方式が導入されないまでも、これまでの数え主義の指導が批判され、数量の構造の理解の指導の必要性が訴えられるようになった。

また、昭和は知的早期教育の効果が多く叫ばれるようになり、早期教育に関連した産業が著しく発展した時代であり、ワークブックなどの教材が保育現場にも押し寄せてくるようになった。そのため、私立幼稚園では日常生活とは離れたところで、ワークブックなどの教材を用いた数量指導が行われるところも多かった。

戦後は、幼児を目の前にした保育経験から生まれた「幼児の興味と自主性を大切に日常生活や遊びの中での経験を大切に」という考えと、発達心理学や数学教育の立場から生まれた「意図的、系統的に指導すべき」という考えが同時に存在し、私立幼稚園では様々な立場に立って数量指導が行われていたと言える。

#### (4) 現在の数量指導

平成になると、日常生活や遊びの中での指導を重視する考えや系統的指導を重視する考えなど、様々な形の数量指導が存在している状況に対し、新しい『幼稚園教育要領』では日常生活や遊びのなかでの数量指導が引き続き強調された。そして、幼児の遊びについては「自発的な遊び」が強調され、また必要感に基づく体験が重視されて、より幼児自身の日常生活と遊びに根差したものとなった。

これは、「数遊び」などのように遊びという名でありながら日常生活とは離れたところでの一方的、一斉的な指導が行われているなど、遊びの解釈が様々であったことに対し、幼児の自発的な遊びこそが幼児の発達に意味のあることだということを示したと言えよう。

しかしながら、日常生活や自発的な遊びの中において幼児に数量の何が育っているかということは直接には見えにくいために、保育現場では実際にどのように指導すればよいのかについて模索しているのが現状のようである。また、私立幼稚園では、すぐに効果の見えやすい一方的な教え込みによる指導に流れたり、独自の方法和信

念をもった早期教育を貫いている幼稚園も存在しているようである。

そのため、日常生活や幼児の自発的な遊びの中でどのような数量に関する事柄が育っているかについての研究が行われている。文部省の委託研究「幼児期における数量的思考力の基礎となる能力の発達と幼稚園におけるその指導方法の開発に関する研究」では、幼児期は数量概念の基礎となる数量感覚を養う時期であることを前提とし、幼稚園における生活や遊びの中で幼児が数量感覚を体験していると思われる事柄を詳細に記録した<sup>29)</sup>。これによると、幼児はあらゆる場面において、様々な数量感覚を体験していることが詳細にわかる。このような試みは、イギリスのEMEプロジェクトにおいてもなされており、幼児の生活、遊びの中での体験が重要であることが示されている<sup>30)</sup>。

このような保育現場に根差した研究により、どのような幼児の生活や遊びの中での体験が、どのように数量の発達に関係しているのかについて、より具体化され、その重要性が徐々に示されてきているのである。

#### (5) まとめ

保育現場では、幼児を目の前にした各園における日々の保育実践とその研究から、現在のような数量指導へと確立していった過程があった。そして、そこにはその地域と親たちのニーズや、発達心理学の研究成果、大脳生理学を根拠に早期教育を訴える教育産業などの影響を強く受けていたことも忘れてはならない。しかしながら、それらの影響を受けながらも、実際の幼児を目の前にしてそれぞれの幼稚園の中で保育実践を繰り返しながら、幼児に適したものをとの姿勢は貫かれていた。

### 3. 考 察 ～幼稚園における数量指導の変遷に影響を与えたもの～

明治初期、日本に幼稚園が設立されてからこれまでの数量指導の変遷をみてみると、日本古来の伝統と欧米からの影響を受けながら歩んできたことがわかる。

明治初期の頃の保育では、日本の伝統的な学習、読書算の1つである計数や計算なども幼稚園で教えていた。しかしながら、一方的、一斉的な知識を伝達するような小学校での指導をそのまま行う計数や計算の指導は、幼児には適さないとの理由ですぐに保育の現場から姿を消してしまった。また、一方では、日本に幼稚園を設立するにあたり、恩物を中心にした西洋の保育が導入され数

量に関する指導もその中で行われていた。恩物は、神の創った自然界の象徴としてもものの構造の理解を示したものであり、立方体等基本的な形の結合と分解によってその構造を知り、その構造を知ることはまさに数量の理解を促すものであった。けれども、この本来的な恩物の意味を日本人は理解できなかったために、単に積木の数を数えること、立方体の角や辺、面の数を数えることを行ってそれが数量の指導となっていた。西洋の影響を受けながらも日本の伝統的な内容が入り込み、両者が交じり合った形になっていたと言える。

その後、明治後期から、大正、昭和まで、数量指導の内容については、「数え主義」と後に批判されるように日本の伝統的な数えることに重点をおいた指導がつづいていたが、昭和の中頃より、数えることだけではなく数の構造を理解させる指導の必要性が述べられ、集合の理解などが内容に加わるようになった。これは、欧米で発展した発達心理学の影響を受けた結果といえる。

数量指導の方法については、以上のような数量指導の内容と関連しながら、日本独自の発達観や欧米から入ってきた発達心理学などの影響を受けつつ、各幼稚園の保育実践の中から生まれたと言えるだろう。一方的、一斉的な幼児期の特質を無視した日常生活とは離れた指導から、幼児期の発達の特質を踏まえ日常生活や遊びの中での経験を重視した指導へと少しずつ移り変わってきた。保育者は実際に幼児を目の前にして、幼児期に適した方法を模索し、実践していかなければならなかったのだろう。

日本独自の古くから受け継がれてきている保育者自身の根底にある価値観や発達観、そして、欧米から入ってくる思想や学問の影響を受けて、日本の幼稚園における数量指導は以上のように変遷してきたと言える。

人間が数量を扱うということは生活と深く関係し、それぞれの土地の文化にあった数量の発展があった。その数量を次世代へ伝達していくという行為は、連続的な歴史性をもつ我々の価値観や子どもの発達観、そして数量に対する考え方が根底にあるだろう。本論では、規準の上での数量指導に対する捉え方と、保育現場での実際の数量指導がどのような過程を経て現在のようになったかを明らかにしてきた。その変遷には、幼稚園の設立以前から、人間が数量とどのように生活してきたか、子どもの発達をどのように考えてきたかということが深く関わっているだろう。さらに数量指導の変遷を明らかにするに

は、幼稚園設立以前の人間と数量との生活、子どもの発達観について、検討することが必要である。そして、それは今後の幼児期における数量指導を検討する上で大きな示唆を与えることになるだろう。

昨年、目先の結果を問題にして専ら知識を獲得するような早期教育に対して、将来にわたって学ぶ力の源泉となる力を育むことを目指そうとする方向性が、「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方に関する調査教育協力者会議」の最終報告として示された<sup>31)</sup>。現在、数量指導も含めた知的教育に対する理解と取り組みは様々である。本論で明らかにしてきたように、幼稚園が設立された当初から知識を伝達するだけの教育の在り方が問われ続けている。しかしながら、欧米で発展してきた内容をそのまま導入するということでは解決できない問題である。日本人の生活に根ざして、人間の知とは何か、これからの社会我々人間が生活していくのに必要な知とは何か、数量指導で言うならば、人間にとって数量は何か、生きていく上でどのような数量に関する事柄を伝えたいか、について捉えなおす必要があるのだろう。それは、古来より受け継がれてきた我々の根底にある世界観や価値観、発達観が基盤となっていくだろう。

## 謝 辞

本論の執筆にあたり、ご指導いただきました本学教授柴崎正行先生に心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) 倉橋惣三、新庄よし子「日本幼稚園史」臨川書店 1930年 P161-164, 181, 192  
文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに 1979年 p56-59
- 2) 倉橋惣三、新庄よし子「日本幼稚園史」臨川書店 1930年 p181
- 3) 倉橋惣三、新庄よし子「日本幼稚園史」臨川書店 1930年 p203-204
- 4) 文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに 1979年 p59
- 5) 文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに 1979年 p136-139, p505-506
- 6) 文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに 1979年 p222, p513
- 7) 文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに 1979年

p536-540

- 8) 文部省「幼稚園教育要領」(昭和39年)
- 9) 安齊智子、柴崎正行「幼稚園設定期における保育内容の確立過程について」保育学研究 第36巻第2号 1998年 掲載予定
- 10) 大阪市立愛珠幼稚園百周年記念事業委員会「愛珠幼稚園百年史」1980 P45
- 11) 文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに 1979年 P500
- 12) 岡山県保育史編集委員会「岡山県保育史」フレーベル館 1964年 p149-152
- 13) 京都教育大学教育学部附属幼稚園「京都教育大学教育学部附属幼稚園百周年記念誌」京都教育大学教育学部附属幼稚園発行 1985年 p13
- 14) 文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに 1979年 P502-503
- 15) 倉橋惣三、新庄よし子「日本幼稚園史」臨川書店 1930年 p97
- 16) 中村五六「三市聯合保育會に於ての演説」京阪神保育會雑誌 第一号 1898年 p81  
他にも、当時の雑誌の京阪神保育會雑誌や婦人と子どもなどにこのような記述が見られている。例えば、明治32年の京阪神保育會雑誌には雑録の中で、「…字を教へ、数を知らしむるが、主にあらずして……」と述べられたり、明治43年3号の婦人と子どもでは、佐々木吉三郎が「…文字を教へ計算を教ふる等の如きことは好ましきことに非ざれば小学校に於けるが如くするには及ばず……」と述べている。
- 17) 某女史「幼稚園に於ける幼児保育の実際」婦人と子ども 第9巻第6号 1909年 P20-21
- 18) 藤堂忠次郎「保育上の矛盾」京阪神保育會雑誌 第十四号 1905年 p212-213
- 19) 野上俊夫「神戸市保育會席上に於いて」京阪神保育會雑誌 第三十八号 1917年 P28-29
- 20) 某女史「幼稚園に於ける幼児保育の実際」婦人と子ども 第9巻第7号 1909年 P17-18
- 21) 中尾ときの「ありのままを」京阪神保育會雑誌 第三十八号 1917年 P37
- 22) 山内太一「幼児の数に対する觀念」幼児の教育 第二十一巻第九号 1921年 P289-291
- 23) 岩下吉衛「子供の数生活の指導」幼児の教育 第二十六巻第十二号 1926年 p14-20

- 24) 日本保育学会編「日本幼児保育史 第四巻」フレーベル館 1971年 P104-105
- 25) 日本保育学会編「日本幼児保育史 第四巻」フレーベル館 1971年 P72-75
- 26) ト部たみ「入学前に於ける幼児の数的生活(三)」幼児の教育第二十九巻第4号 1929年 P22-26
- 27) 東京女子師範学校附属幼稚園「満四歳児の数観念」幼児の教育二十九巻第5号, 6号 1929年 P36-45, P42-50
- 28) 銀林浩「水道方式<遠山HOLPプラン>」未来をひらく幼児教育9 持田栄一編著 チャイルド本社 1974年 P51-56
- 29) 幼児教育方法研究会 代表 山内昭道 文部省の委託研究「幼児期における数量的思考力の基礎となる能力の発達と幼稚園におけるその指導方法の開発に関する研究」1994年
- 30) EMEプロジェクト編著, 角尾稔, 永野重史 訳「幼児の数体験」チャイルド本社 1989年
- 31) 「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について-最終報告-時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方に関する調査教育協力者会議 1997年
- \*12) 東京都港区教育委員会「港区教育史-百二十年の教育のあゆみ-上巻」ぎょうせい 1987 P225-226
- \*13) 高崎市高崎幼稚園百年史編纂委員会「高崎幼稚園百年史」高崎市立高崎幼稚園事務局発行 1986 P9-12
- \*14) (\*1と同じ) P227
- \*15) (\*4)と同じ P60
- \*16) (\*12)と同じ P227-229
- \*17) (\*1)と同じ P217-218
- \*18) (\*8)と同じ P495-505
- \*19) 京都教育大学教育学部附属幼稚園「京都教育大学教育学部附属幼稚園百周年記念誌」京都教育大学教育学部附属幼稚園発行 1985 P13 など
- \*20) (\*1)と同じ P209
- \*21) (\*6)と同じ P149-152
- \*22) 金沢大学教育学部附属幼稚園「百年のあゆみ」P39-40
- \*23) (\*22)と同じ P41
- \*24) (\*6)と同じ P148-149
- \*25) (\*13)と同じ P13-18
- \*26) (\*3)と同じ P531-532
- \*27) 記念誌編集委員会「長崎大学教育学部附属幼稚園百年のあゆみ」長崎大学教育学部附属幼稚園発行 1986 P29
- \*28) 文京区教育委員会「文京教育史-学制百年の歩み-」東京都文京区教育委員会発行 1983 P324-330
- \*29) 松本市立松本幼稚園百年史刊行会「松本市立松本幼稚園百年史」松本市立松本幼稚園発行 1987 P135
- \*30) (\*19)と同じ P22-29 など
- \*31) 金沢大学教育学部附属小学校百年史編纂委員会「金沢大学教育学部附属小学校百年史」金沢大学教育学部附属小学校百年史刊行委員会発行 1974 P83-87
- \*32) (\*13)と同じ P24-33
- \*33) (\*8)と同じ P507-510
- \*34) 日本保育学会「日本幼児保育史 第二巻」フレーベル館 1968 P50-52
- \*35) (\*12)と同じ P372
- \*36) (\*28)と同じ P330-332
- \*37) (\*6)と同じ P152-153

表中の参考文献

- \*1) 日本保育学会「日本幼児保育史 第一巻」フレーベル館 1968 P62-63
- \*2) 柳池校百周年記念行事委員会「柳池校百年史」京都市立柳池中学校発行 1969 P24-27
- \*3) 石川県教育史編さん委員会「石川県教育史 第一巻」石川県教育委員会発行 1974 P903-904 など
- \*4) 文部省「幼稚園教育百年史」ひかりのくに 1979 P56-57 など
- \*5) (\*4)と同じ P808-809
- \*6) 岡山県保育史編纂委員会「岡山県教育史」フレーベル館 1964 P148 など
- \*7) (\*4)と同じ P810-811
- \*8) 千代田区教育委員会「千代田区教育百年史 上巻」千代田区発行 1980 P510-513
- \*9) (\*4)と同じ P813-815
- \*10) (\*4)と同じ P59-60
- \*11) (\*1)と同じ P179-180

- \* 38) (\* 28) と同じ P 333-334
- \* 39) (\* 3) と同じ P 978-979
- \* 40) 創立100周年記念誌編集委員会「ふよう創立100周年記念誌」大阪教育大学附属幼稚園発行 1993  
P 58
- \* 41) (\* 19) と同じ P 30
- \* 42) (\* 34) と同じ P 60-65
- \* 43) (\* 6) と同じ P 153-154
- \* 44) (\* 6) と同じ P 154-155
- \* 45) (\* 6) と同じ P 158-159
- \* 46) (\* 34) と同じ P 174-176
- \* 47) (\* 4) と同じ P 505-506 など
- \* 48) (\* 34) と同じ P 184-186
- \* 49) (\* 13) と同じ P 58-61
- \* 50) (\* 19) と同じ P 42
- \* 51) (\* 4) と同じ P 950-960
- \* 52) (\* 22) と同じ P 52-53
- \* 53) (\* 19) と同じ P 53